赤穂義士銘々伝 全

特42
940

U.2/435/23
特42
94U

浅野内匠
殿中ニ於
テ吉良上
野介ニ刄
傷ニ及フ
圖

赤穂の義士大
石以下四十六人
讎吉良ヲ討ツ

國乱れて忠臣現れ家貧しくて孝子出と實あるかな
赤穂の義士大石内蔵之介以下四十七人其主君吉良
氏の為に身を殺し家まさぶる　の難に遇る
が故に千辛万苦を嘗るの後終に本懐を
遂せしを以て天然の壽を保つ能ずず皆泉岳寺に
墓碑一基の主と成れり然れ共此難に遇ハ
されバ萬年不朽の芳名を輝を得んや
今に到て見れハ此人々を不幸とや
云ん幸とや言ん論者と虽も慢りに
説を下し難けん誰か盛んと成さバ
らんや

大石内蔵之助藤原義雄
高千五百石
行年四十五才

良雄ハ播州赤穂の人なり先祖ハ藤原秀郷
より秀郷関東に越くの時本領近江
なる大石村に一子を留む子孫相続して

大石村に住す因て氏とせり内蔵之介の
曾祖父良勝浅野采女正長重に事ふ
祖父を良欽と称す父を權内良昭と云父ハ
早世せしかバ良雄十五才にして家督し内蔵之
助と称す長短に事へて家老職たり主家
大變の後千辛万苦して主君の怨讐を
討て義名を末世に傳へたり

大石主税良金
部屋住
行年十六才

良金ハ良雄の嫡男にして性質温和にして
身の丈五尺八寸力量衆に勝れ十五才
父と共に盟約の列に加り関東に下り垣見
左衛と称す打入の夜搦手の大将なり吉
良左兵衛殿と戰ひ数群の働して衆目を
驚せりとかん

吉田忠左衛門藤原兼亮
高五百石
行年六十才

兼亮ハ赤穂の世臣あり身躰剛壮容貌人ゑ勝れ且敏捷ゑり足軽頭郡代を兼さり国党起るゑ及て浪人して田口一真と号し篠崎太郎兵工と云仇の家を伺ふとむ也深し討入の夜搦手の大将主税を捕佐し花々敷働をなせしハあもれの老人あり

堀部彌兵工金丸　隠居　行年七十七

清和源氏左馬頭頼国の末孫あり金丸ハ山本流の軍学ゑ達し旦暮懸れる老人あり討入の夜誤て井中ゑ落入し敵の突出し鎗ゑもぎり跳上りて一刀ゑ其れを切り倒せしハ天晴の早業あり

堀部安兵工武常　高三百石　行年三十四

越後国高田の郷士大沢六右工門の三男ありしが或時父六工門高田軍藏ゑ討れし時其場を去ず敵を討ち又叔父菅野六郎右工門村上庄左工門兄弟ゑ討れ時も速ゑ復讐す弥兵工の養子となり更ゑ主君の怨敵を討しハ不思議の強傑あり

近松勘六行重　高三百石　行年三十四才

武林只七隆重　高千両三人扶持　行年三十二才

勝田新左工門武尭　高百石　行年廿四才

中村勘助正辰　百石　行年四十五才

夜討の時身の大六尺計の男四方髪ゑていかめしきか鳥井利左工門と名のりかのれら浪人のよるゑあく是非ふき物狂ひよ自ゑ物ゑせんと只七ゑ討てかゝる只七大ひよ憤り討合ふとよろ余程の達人と見へ持余しる様子近松勝田の両人それを見て只七救ふぞと声をかけ左右より切てかゝる鳥井三人を引受け少し退くところを只七飛込ゑ只一刀ゑ切倒す後より侍ひ二人進ゑ来りしが此ていをゑるより逃出したり勝田追

かけ一人
後より
一討る切
る近松今
一人を追かけ
及る彼待ち取て
返て打合ふ所
勘六が指二本切落す
勘六大ゐ怒てうち込太刀のそ
けーれ八又逃出すを何方までも
追かけさり侍ハ掾より飛下り
疑をきーてかけ出すを勘六続て
飛下りーが暗さハ暗ー不案内ゆへ
迷て泉水ゐ落入りーを彼再ひ取て
返ーー太刀まで切りたれ共鍔帷子の
兜頭巾ふれハ事を負ず中村勘次されを

見るより駆来り渡合ふ隙ゐ勘六上り来り
其待ひ甚ゐ渡されゐ余ゐ憎さ奴このな勝手不知
ーなくかの目ゐ合うと立かりて切伏せり
原惣右門元辰 高三百石 行年五十手
旧姫路の藩士ーが遺
恨ゐより内藩小野其何を
打取り大阪ゐ退去ーー後
赤穂の臣とゐ曽て大
義ゐ子せんとする時
毎其機を察ーて自殺す故ゐ
元辰一層志を固ーー終ゐ本懐を達ーーなり
奥田貞右門信行 部屋住 行年廿五才
孫太夫重盛の養子はして近松勘六の弟ゐ主家滅亡のーち
関東ゐ下り西村毋下と称す刀の目利ゐ精ーく討入の夜名刀を
以て無双の働さをふーーなり
奥田孫太夫重盛 高二百石 行年五十七才

筑前内藤家の臣あり一が後浅野家に仕へ馬廻り役を勤め赤穂退去の後西村清左エ門と愛名に幹貞右エ門に馬術の奥儀を傳へ荒馬を乗る妙を得たり又弓術の名人あり

小野寺内秀和 高二百石 行年六十才

秀和八文学武術に憐〳〵く又和歌をよくす京都留守居を勤め一朝大変の後江戸へ下る其妻に分るゝとて「おもひ出バ音羽の山の秋の色に かれ一時の袖そとも」と妻に書る「筆の跡しるも涙の時雨哉」といくかすぐき言の葉もふし」と返哥一たり秀和一世の秀哥算ふかゝす

片岡源五右エ門 高百五十石 行年三十七才

六右エ門の養子とあり主君切腹の期に及び遺言を奉一て本国に馳行六右に傳へて籠城殉死を決す下男元助誠忠の者にて討入の夜大功あり

岡野金右エ門包秀 高二百石 行年二十五才

幼より出家一てあり一が主家大変の後父八者年に一て八十に近く長男九十郎八早世一ろれ八大石父の志を察一不悶に思主秀に飯俗せ一め連判に加へ一ぶり忽ち佛心を翻一武道を全ふせ一八皆感賞ふ一たりとぞ

富森助右エ門正固 高二百石 行年三十四才

本懐を達一て後ち細川家へ預けとなり一る或時衣服を賜り着換んとせるとき下に女の白小袖を着せ一かゞ人皆其故を問に本国を出るとき寒気に当らん一を恐れ母の賜ひ物なれば肌身離さゝ着たるよ一を聞て其忠孝の全きを賞一るとぞ

小野寺孝右門秀富　部屋住　行年六八才

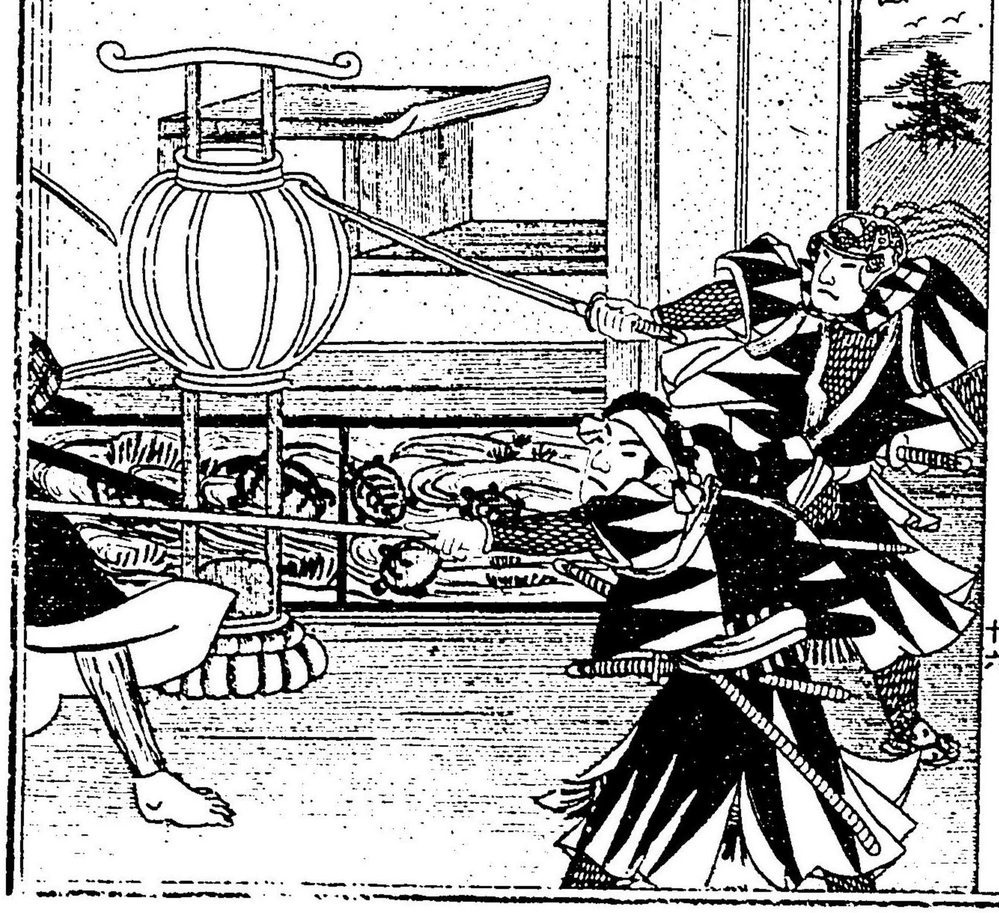
十内秀和の養子なれども未だ廿日も立ぬ内主家滅亡に及ぶされども志し金鉄の如く天晴忠誠の士と謂ふべし

赤垣源蔵正賢　高二百石　行年三十五才

姓として大酒を好めるが酩酊の上にても聊礼を乱せしなし元来剛勇の質にて浪人中常に満酔せざるうちは討入の時も一瓢を腰にし十分の働をなせしとぞ

間瀬久太夫正明　高二百石　行年六十二才

正明は其姓廉直にして忠義一途の士なり大目附役を勤しが離散の後浪花に寓し屢々山科なる大石の閑居に會し計議を定む或時蛙合戦を見て感ある処ありて良雄に復讐の期を促し終に本意を達したり



潮田又之丞高教　高二百石　行年三十五才

馬廻り役を勤む忠勤忘りなく固画図役兼勤し無双の勇士なり四年に君と母との仇を討しは不思議のなり

千葉三郎兵衛光忠　高百五十石　行年三十五才

浅野家の寵臣なりしかゝと勘気を蒙り本国に引拂の途中主家の凶変を聞き妻子を伊豫の遣し自分は大石に乞て連判に加りたり其忠臣感すべし

矢頭右門七教兼　部屋住　行年十八才

父病に臥て支事能ず強て大石に乞て若年作ら連判に列す

倉橋傳介武幸　高廿石五人扶持　行年三十四才

武幸は東下して小切商人となり日夜敵の近辺を徘徊して機密を大石に通じ頗る便宜を得たりしとぞ

村松喜兵工秀直入道隆山　高五十石五人扶持　行年五十才

同三太夫高直　行年九七才

秀直ハ下邸の留守居なり

浪人の後医を業とす〜なり辞世よ「草枕結ぶ夜殿の夢覚て常世か〜る春の厂金」高直ハ秀直の長男よ〜て勇剛の士あり討入の夜父と共ニ抜群の働をす〜こり

間瀬孫九郎正辰　部屋住　行年九五才

久太夫が一子よ〜て父ニ劣らぬ忠士あり力量衆ニ優れ百斤の石も重〜とせず主家滅亡の後さぞ身を窶〜本望を達〜こり

磯貝十郎左工門正久　高百五十石　行年九五才

正久公君の葬送のとき泉岳寺の墓前ニ於て殉死せんとす井岡吉を尽〜て之を止む後輩の志尤も深かりしとぞ

早水藤左工門満尭　高百五十石　行年四十才

殿中の騒事を聞より三月廿日の朝江戸を出立〜百七十里を四日半ニ成て赤穂へ着〜第一番ニ注進す

水村岡右工門貞行　高百五十石　行年四十六才

長矩ニ仕へて馬廻役ニ昇て文学を好めり赤穂退去の後江戸ニ来り姓名を変じて石田左膳と称す

神崎与五郎則休　高百五十石　行年三十八才

則休幼名を大千代といふ十三才の時徒弟の仇を討〜勇少年なり同姓弥左工門が名跡をつき馬回り役を勤む離散の後町人ニ身を窶〜吉良家ニ入り込邸中の模様を伺ひ〜とぞ

矢田五郎右エ門助武　高百五十石　行年二十九才

助武身の丈六尺余り馬面り役を勤めしが東都を下り赤垣と共に芝に住す武助と賞名して時折ハ遊興に事よせ敵の動静を伺ひしとぞ

間喜兵エ充延　高百石　行年六十才

同重次郎光興　部屋住　行年二十五才

同新六郎光風　部屋住　行年九十四才

充延ハ宝蔵院流の鎗の達人なり一家中師範さり討入の後ある邸の門前に捨置さる鎗印に「呂もゝく生過さりと思ひしに今待得さる老の樂しさ」

伴二人も列に加り都て三人志を一にせしハ梅氏に劣らぬ忠士と謂べし

不破数左門正種　高百石　行年三十四才

二種ハ濱奉行を勤しか試斬を好み或時屍を堀へ脇試せしがろん〳〵表向手討と称し除る髻を切て金子を賜ひ放ち玉ふ恩を感じ主家大変の後大石に請ひ終に本意を達しさり

大石瀬左門信清　高百石　行年九十七才

舊本多家の士なりしが内匠殿内家に請臣とは馬廻りしが義士共に金鉄の志を堅し義名を千載に残しさり

菅谷半之丞政行　高百五十石　行年三十七才

政行若冠の頃ハ義少年なりしかハ継母恋慕しさの〳〵に挑めども聴ざるに怒りて堪へす失ハんとす内匠との間玉ひ汝家に在ハ罪と得んとて他国せしめ玉ひしが大憂の時金千両を持参し盟約に加りさり

吉田沢右エ門義貞　高百石　行年九十九才

忠左エ門の嫡子なり良人にて麹町に住さ

田口左平太と称し忠孝無二の士〻

岡島八左衛門常樹　高廿石五人扶持　行年廿九才

元来猛烈の士あり主家亡しとき大野九郎兵衛非道を憎み大いに罵れむ畏れて逃亡し後吉良家の中間部屋取入り菓子を賣元價を減るふぞ長負を受て邸中を探りしとぞ

横川勘平宗利　高五両三人扶持　行年三十七才

宗利浪人の後江戸芝の辺ある伯父の家に寓居伯父八復讐の盟あるを〻らす奉公口をすゝめしかと皆ず本懐をとげし翌日市中を賣歩行く仇討連名中宗利の名あるを見て始

前原伊助宗房　高十両五人扶持　行年四十才

其志を知りしとぞ

江州前原の産あり曾て鎌倉に遊び一片浅野の臣玉虫十右衛門不慮に殺害せられしを伊助直ふ去ば敵を討とり此由内匠どの聞玉ひて召抱へられしか後盟志の列ふ加はり義名を傳へたり

大高源吾忠雄　高廿石五人扶持　行年三十二才

忠雄ハ俳徊をよし俳名を子葉と号く其角と交り深く其秀吟の多き人の知る処なり辞世の句ふ「むめて呑茶屋もあるなりーどの山」

△ふれども忠勇無双の傑士ふれむ大石うの志を感じ盟約の列ふ加へ士分として本望を遂しとぞ

杉野十平治次房　高八両三人扶持　行年廿八才

浅野の近習役逃居の後老母次房の志を察し自殺せしかば討入の夜も母の志を空ふせしと後郡

三村治郎左門包常　高五両三人扶持　行年三十七才

包常ハ少身なれども志ハ鉄石の如く常ふ大石ふ随従し瀬尾孫左門矢野伊助諸共諸事を賄し両人の働をなしたり中途ふ脱定せしも包常少しも変する色なくふ

貝賀弥左門友信　高十両三人扶持　行年五十七才

内蔵助友信の志を察して深慮を回らし達さり五十八通の誓紙を認して返達せしむ依て未練の士ハ大ふ悦ひ幸とし変心せしかば吉良家の間者疑念を晴し退散せし其期を察し敵郎ふ討

茅野和助常成　高五両三人扶持　行年廿七才

入一とぞ三平常世の弟あり赤穂に仕て弓術の達人なり又貫雅を好み俳名を如柳と云魂や風なもある扇

寺坂吉右衛門信行　高五両二人扶持　行年四十三才

信行ハ浅野家の足かる

明治九年一月九日印刷出願
同　三年一月九日出版
京都市下京区寺町通松原上ル京極町十三番戸
著作兼発行者　今井七太郎

京都市下京区新門前小堀東入松原町六三番戸
印刷者　伊藤伊之介

賣捌所　寺町松原上ル　今井七郎兵衛

特42
940

091907-000-3

特42-940

赤穂義士銘々伝

今井七太郎

M23
DBP-0004